



「感じたら動く」をテーマにした町主催の「保育研究会in厚真町」が8月5日、総合福祉センターで開かれ、保育関係者など全国から約160人が参加しました。

研究会では、宮の森こども園の宮下葉子園長が、町内2園で行われた環境整備の概要を説明し、宮の森こども園の秋田理恵副園長とこども園つみきの井鳥佳織副園長が、危険を伴う鉄製遊具から築山や手作りの木製遊具に切り替えた経緯を紹介しました。この結果、環境整備前に比べて危険を回避するために設けられていたルールが減り、子どもたちの自発性や創造性が磨かれるようになったなどメリットが披露されました。

また、2園の環境整備のアドバイザーで保育環境研究家の木村歩美さん、保育の安全などの分野で活動しているジャーナリストで駒沢女子短大教授の猪熊弘子さん、長野県の認定こども園「ちいろばの杜」園長の内保亘さんが、保育環境の課題や解決策などについて意見を交わしました。

「保育研究会in厚真町」を開催



全国から約160人が集まった保育研究会

サーフィン大会に来場者も熱視線 「厚真町長杯」 「meet up ATSUMA」



厚真町長杯のガールズ部門で優勝した石田海夏選手

日本サーフィン連盟(NSA)公認の「厚真町長杯」と、競技歴を問わないサーフィン大会やマルシェなどが楽しめる「meet up ATSUMA」(実行委主催)が8月6日、浜厚真海浜公園で同時開催されました。

サーフィンの大会には、全国のトップ選手やアマチュアまで総勢約130人が出場。低気圧の影響で刻一刻と変化する難しいコンディションの中、選手たちはパドリングやテイクオフを繰り返しながら果敢に技に挑みました。

また、マルシェでは、地元を中心に約30店がキッチンカーなどを連れ、厚真の味覚や野菜、ウッドクラフトなどの特産品などを販売。広場では、フラダンスなども披露され、大会を盛り上げました。宮坂町長は「サーフィンの振興につながる取り組みになると思う。これからも厚真のファンになっていただきたい」とあいさつしました。

こぶしの湯あつま 謝恩フェスティバルにぎわう

あつまスタンプ会主催の「こぶしの湯あつま謝恩フェスティバル」が8月6日、こぶしの湯あつま前の特設会場で開かれ、来場者はバーベキューや野菜の袋詰め、ビンゴ大会などを楽しみました。

フェスティバルは、こぶしの湯あつまの利用者への感謝と還元を目的にしたイベントで、4年ぶりに開催されました。町公式キャラクターのあつまるくんと触れ合いや音楽ステージも行われ、来場者は時間を気にせず心行くまで休日を楽しみました。



手話つきの歌謡曲を披露して会場を盛り上げる町民グループ

フジトランスコーポレーションが 町内でボランティア活動

総合物流企業のフジトランスコーポレーション(本社・名古屋市)が7月19日、新人研修を兼ねて町を訪れ、厚真市街地でごみ拾いのボランティア活動を行いました。

訪れたのは、同社取締役の北野博俊さんや関連会社の有限会社厚真ファーム社長の森部邦雄さんを含む総勢22人。総合福祉センターで町長にあいさつした一行は、厚真市街地に出かけて枯れ枝や紙くずなどビニール袋3袋分のごみを拾いました。北野さんは「ごみが少なくきれいな町ですね」と話していました。



ごみ拾いを終えて記念撮影するフジトランスの皆さん

苫小牧地方食品衛生協会が 食中毒の予防呼びかけ

苫小牧地方食品衛生協会は8月2日、町を表敬訪問して食品衛生強化月間にちなんだ食中毒の予防について注意を促しました。

訪れたのは、苫小牧保健所生活衛生課の橋本潤子課長、苫小牧地方食品衛生協会の福原裕会長、同協会厚真支部の司義之支部長、同支部事務局の小寺せい子さん。4人は、宮坂町長に食品の取り扱いや衛生管理の徹底などへの協力を依頼しました。



食中毒の予防を呼びかけた皆さん

町主催の胆振東部地震5年シンポジウム『「平成30年北海道胆振東部地震」を振り返る、被災からこれまで。』が8月4日、総合福祉センターで開かれ、オンラインを含め約130人が参加しました。

シンポジウムは、3部構成で開きました。第1部は「自然」の視点から室蘭工業大学副学長の木幡行宏さんと同大学教授の川村志麻さんが地震発生や斜面崩壊などのメカニズムについて講演。第2部は「技術」の視点から国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部厚真川水系砂防事業所長の吉田裕敏さんと北海道建設部土木局道路課長の塩田雅史さんが復旧事業の概要について講演しました。

さらに、第3部は「ひと」の視点でパネルディスカッションを開き、東北学院大学の定池祐季准教授の進行で、任意団体「つむぎ」の村上朋子代表、町社会福祉協議会の山野下誠事務局長、任意団体「石狩おもいやりの心届け隊」の熊谷雅之隊長、吉田良行町防災担当理事が登壇しました。

定池准教授が避難所の変遷や仮設住宅、道内初の生活相談支援員の配置などを説明し、4人が意見を発表。村上代表は「顔の見える人と人のつながりの大切さを感じています」、山野下事務局長は「経験を基に、次の災害にしっかりと備えたい」、熊谷隊長は「被災地のニーズを考え、行政などとの調整や支援者への支援を行いたい」と語りました。

胆振東部地震5年 シンポジウム開く



「ひと」の視点から意見を交換する4人のパネリスト